



第2章

浪江のこころプロジェクト ～これまでとこれから～

浪江のこころプロジェクトでは、毎月の『浪江のこころ通信』の発行に当たって、全国各地のNPOや支援団体等に所属されている「取材協力者」の皆様に、取材と原稿作成のご協力をいただいています。

プロジェクトでは、取材協力者の皆様と共に、浪江のこころプロジェクトのこれまでの歩みを振り返り、今後の方向性について話し合う機会を、平成29年1月と8月の2回にわたって設けました。この章では、その話し合いの中から見えてきた、浪江のこころプロジェクトの「これまでとこれから」についてまとめました。

なお、巻末（176ページ）に、第1章に掲載された記事の取材にご協力いただいた皆様のお名前とご所属を掲載しています。

これまでの 浪江のこころプロジェクトを振り返る

平成29年1月20日(金) 午後、いわき市内にて「浪江のこころプロジェクト取材協力者情報交換会」を開催しました。

その中で「浪江のこころプロジェクトこれまでの軌跡を振り返る」と題したパネルディスカッションを行いました。

とき 平成29年1月20日(金)

ところ いわき産業創造館

(福島県いわき市平字田町
120 LATOV 6階)

登壇者 (敬称略)

● パネリスト●

宮口 勝美

浪江町副町長

石橋 英昭

朝日新聞社仙台総局 記者・編集委員

鍋嶋 洋子

取材協力者／NPO法人ちば

市民活動・市民事業サポート

クラブ専務理事・事務局長

● コーディネーター●

櫻井 常矢

浪江のこころプロジェクトプ

ロジェクトリーダー／高崎経

済大学教授



取材協力者情報交換会の様子



櫻井常矢プロジェクトリーダー

櫻井 震災から6年、ようやく避難指示解除のめどが立つ状況となってきました。これまではいつ町に帰れるのか分からず、県外避難者と県内避難者という見方はあっても、浪江町に帰ることができないことは、全ての町民に共通でした。しかし、帰町が始まるこれからは、町に戻る方と戻らない方という捉え方が出てきます。多くの町民が戻っていない中で復興が始まる状況は、困難な道なのであることは言うまでもありません。浪江に帰る人、帰らない人が並存する中で復興を進めていく、新しい緊張感を持った局面に入っていくことでしょう。そういった変化の中で、『浪江のこころ通信』の果たすべき役割も改めて問われてくると思います。この「浪江のこころプロジェクト」では、あらかじめ長期的な方針を決めるということではなく、取材協力者の皆さんや町役場の皆さんと一緒に、定期的に振り返りを行いながら方針を

決めて進んできました。今回の情報交換会も、これまでのプロジェクトについて振り返り、今後の方向性を見出す場したいと思います。

◆原子力災害の特殊性と『浪江のこころ通信』

櫻井 今回パネリストをお願いした石橋さんは、新聞記者として東北の津波被災地・原発被災地取材されてきました。その中で、浪江町復興支援員の会議に同席いただくなど、我々の動きを見守っていただけています。そのような第三者的な視点から『浪江のこころ通信』をどうご覧になっていますか。

石橋 震災時には東京におり、論説委員として社説を書く立場でした。浪江町とのご縁は、震災の年の7月に役場へ取材に伺った時に遡ります。町長のお話を聞き「そもそも自治体はそこに住む人で構成されるのが原則だが、原発事故による避難の場合、そういった属地主義を超えて、複数のまちと人がつながる新しい仕組みが必要」と考えるようになりました。その後、仙台総局に転勤となり、津波被災の方と合わせて原発避難の方への取材を行うようになりました。津波で被災された方と、原発事故によって被災し避難された方とは、その置かれた状況に違いがあります。一つは時間軸の問題です。津波被災は5年、10年といった国の設定した年限や、失った家を再建する、町のコミュニティを再生する、生業を再建するといった明確なゴール



石橋 英昭さん

ル、直線的な時間軸に沿った流れが見えますが、原発被災については、そういった一つの方角性が見えません。避難の過程で何度も何度も選択を迫られ、それが現在進行形で続いている感覚があります。

もう一つ空間軸についても違いがあります。お正月にふるさとで初日の出を見に行くといったことも津波被災地であれば比較的近くにあります。原発被災は、距離的にも心理的にもふるさとが遠いと感じられます。避難先でもばらばらに住まわれているため被災者同士の距離も大きいし、加えて避難先で、原発で避難したということや言いにくいという方もおり、避難先の住民との距離もあります。

一方で、原発事故にせよ自然災害にせよ、自分に非のない事象によって避難を余儀なくされ、生活を再建していくというプロセスは、共通している部分もあるのではないのでしょうか。



宮口勝美副町長

ばらばらになった人々をどうやってつないでいくか、ふるさとを離れた中でどうコミュニティを維持していくかということでも共通性があると思います。さらに、支援者と被災者との関係性が重要になってきており、その一つの在り方が『浪江のこころ通信』であると思います。そういった各地の取組みの中から、コミュニティ再生に向けた共通の知恵が生まれてくるかもしれないと思います。

櫻井 被災者の置かれた状況が変化し続けている。原発被災地の特徴と、そのコミュニティ再生に向けては『浪江のこころ通信』の営みの中に可能性があるのでないかという点を提示していただきました。今の話を受けて副町長はどう感じられましたか。

宮口副町長 私たちも、同じように感じています。原発被災と津波被災との違いで最も大きいのは、不安の解消がされていないことだと思います。

町民は、避難指示解除と聞いて、町が復興していくこと自体は嬉しく感じると思いますが、その一方で、今後の生活への不安も大きいのです。

復興に向けては、町内の事業所も役場もどこも人材不足で、町民だけでは限界があります。避難指示が解除されることで新たな力が町に入ってくるができる、そのためにも避難指示解除は必要だと思っていますが、町民から見れば、生活できない所に帰れるかという思いが強いです。役場がまずは先陣を切るから、帰れるようになったら帰ってきてと言っていますが、今の生活支援が切られることへの不安がとても大きいように感じています。

櫻井 関東で持ち家を建てられた方の中には、浪江出身であることを隠して暮らしている方がいると聞きます。家を建てれば、すなわちそれで生活再建・復興ではない、ということも忘れてはならないことかと思えます。

◆生きているメディアとしての『浪江のこころ通信』

櫻井 続いて、鍋嶋さんから取材を通じて感じていること、取材から見えてくる町民の思い、取材に当たった課題といったことをお話いただきたいと思えます。

鍋嶋 千葉を拠点に東京・埼玉・山梨方面を含めて、50件ほど取材してきました。震災の夏から取材に入りましたが、その頃はみんな同じくらい体験をしたという思いを『浪



鍋嶋 洋子さん

江のこころ通信』を通じて共有したい、元気でいることを写真で知人に伝えたい、という方が多かったと思います。その後、震災から3、4年経つと、取材のお電話をすると、「自分でいいの、特別なことはない」と言われることも出てきました。特別なことではなく日常をお話いただければとお伝えしても難しい。自分の記事をほかの町民の方が読んだときに、町から気持ちが悪く思われるのではないかと、町を捨てたと思われたりしないか考えてしまうのだと思えます。

記事の内容としては、取材の時は、今の生活環境について、つらい境遇もお聞きするのですが、つらいこと・悲しいことはなかなか記事に書きにくいし、またご本人に確認すると書かないでほしいとおっしゃることがあるため、どうしても明るい記事が多くなっています。昔の人間関係、家族関係を壊さないようにと考える

どうしても言葉を選び、本音の部分が出にくいように思います。そういった記事内容になっていることが、今後ますます環境が変わる中で果たして良いのかな、と思い悩みながら書いているところがあります。

櫻井 『浪江のこころ通信』は町の復興のためだけにある訳ではなく、町民一人一人のためにもあると考えているので、広報に掲載する前に必ず本人の確認をいただくようにしていますが、それゆえに本音が出てこないこともあるということだと思います。正確に情報を伝える新聞記事とはプロセスが違っていると思いますが、浪江のこころプロジェクトの「本音を聞く傾聴」の部分と「紙面で情報を伝える」部分について石橋さんから見てどのように評価できますか。

石橋 これまでは紙面でしか見てこなかったのですが、今までの話を聞いて、紙面から見えない言葉、語れない言葉を全部含めて捉えないといけないと改めて感じました。

『浪江のこころ通信』の役割として、一つは、第三者から見ての記録であること、アーカイブとしての役割があると思います。地震・津波という自然災害に原発事故が加わった複合災害によって、人々がどのような被害を受け、どのようにコミュニティが破壊されたのか、また、その後どのように生活やコミュニティを再建していくのか又はできないのか、といった人々の心の記録になっているのだらうと思います。

もう一つは「支える」ということ。傾聴という言葉が出ましたが、支援する人が話を聞きに行き、その言葉を受け止めることで当事者を支

えるという役割もあると感じます。

三つ目には「つなぐ」という役割、広報を通じて町民同士をつなぎ、想いを共有していく、という役割があると思います。若者であればSNSを活用しているところかもしれません。

ただ、これまで効果を発揮してきた三つの役割が、今後は試練にさらされるのではないかと感じました。それぞれの心が多様化していく中で、例えば町に戻る人と、戻らずに避難先に定住していく人との間をつなぐ機能を維持していくことができるでしょうか。また、町に生まれ育った世代と、避難先が長い若い世代との間をつなぐ装置となれるのでしょうか。それとも町を懐かしむ世代のためのつながりづくりになっていくのでしょうか。

いずれにしても、今後の『浪江のこころ通信』のミッションは、状況が変わるにつれて定義し直しながらかつていく、生きているメディアなのではないかと思っています。

◆いれからの町の復興と『浪江のこころ通信』

櫻井 若い世代と町との関わりについて、感じていらつしやることはありますか。

宮口副町長 今年も1月8日に震災後6回目となる成人式を行いました。浪江町には中学校が三つあり、これまでの成人式は中学校ごとで集合写真を撮ったり、それぞれの校歌が流れたりするのが習慣でした。

今年の成人式は避難先で中学校を卒業した世代が対象となるため、参加者が少ないのではないかと不安に感じていましたが、中学2年生までは一緒だったつながりがあったためか、予想よりたくさんの方に参加いただくことができました。

ただ、今後、浪江の中学校を経験していない世代になっていくと、町の成人式の持ち方も変わらざるを得ないと思います。親たちは地元で成人式を挙げさせたいという思いがあるかもしれないが、子供たちはそうは考えないかもしれない。そうなった時に、どのように町を伝えていけばいいのか、と考えます。

櫻井 鍋嶋さんが若い方を取材された際に感じたことはありますか。

鍋嶋 東京でプロボクサーをしている20歳代の方を取材したことがあります。福島・浪江と書いたリンクスでリングに上がり、声援を受けるのが力になるとのことでした。このように、浪江出身であることを誇りに、プラスに思える若者が増えれば良いかなと思います。

櫻井 浪江のこころ通信は、一人一人がそれぞれの土地で頑張っていくことを知ることで励まし励まされ、自立を支えていくものであって良いと思っています。一方で、ふるさと浪江というもののへの思いが、特に若い世代からは言葉として出てこなくなる状況もあるかもしれません。こういったことも含めて、通信が今後こうあってほしいという想いをお話いただきたいと思います。

石橋 私は通信を50年、100年続けて欲しいと

思います。後世への記録という意味から、自分のふるさとが大変な被害を受けてしまった、その経緯を含めて伝えていく使命が、実際に体験した人、またその子孫にはあるのではないかと
思います。

また、自立をより促すような役割もあるかと思
います。町に戻って頑張る人と、町外に定住
された人との間で、一緒に復興について考える
ことができる装置として機能できないでしょ
うか。今は、第三者が支援して機能していま
すが、町民自らが担うメディアとなっていく動
きが出てきて良いのではないかと思
います。

さらに、取材協力者のつながりも浪江町の
大きな財産になるのではないでしょう。町民が
全国各地に分散し、そこにいる支援者とな
る。そうすると支援した側は浪江のことを忘
れなくなる。そうして浪江に縁がある人が増
え、交流人口も増えていくのではないかと思
います。

鍋嶋 『浪江のこころ通信』は、プラスの発信だけ
でなくてもいいと思っています。例えば、町に
戻って暮らしている方が「友人が居なくてさ
みしい」といった発信をすることで、じゃあ、自
分が帰って頑張るか、となるシニア世代もい
ると思います。また、町外にいて時間と経済に余
裕があっても、自分らしい暮らしではないと感
じている方が、町内に帰ることで変わること
があるかもしれない、そういったつながりもでき
るようになればいいと思います。

櫻井 ありがとうございます。このプロジェク
トを進める中で素晴らしいと思
っていることは、

あくまでも町民のニーズに合わせて『浪江のこ
ころ通信』の在り方を考えていく、ミッシ
ョンを常時更新していくことが一貫して大事にされ
てきていることです。

今後のプロジェクトに向けた確認点を、3点
にまとめたいと思います。

1点目は通信がこれまでも大事にしてきたこ
とですが、町民の話や丁寧な聴くことです。そ
れが原稿に出るかどうかは別にして、聴くこと
の大切さです。人は悲しみを共有するだけでも
元気になります。まずは傾聴することが取材協
力者の役割として大切であることを再確認しま
した。

2点目に若い世代への継承、若い世代とふる
さととのつながりをどう作っていくかというこ
とがあります。町の復興は今の世代だけでは果
たせるものではないので、町の記憶が薄い世代
が成人式を迎えるようになってきているなか、
次の世代に記憶をどう継承していくのかは大き
な課題だと思います。これは『浪江のこころ通
信』だけではできないことではありませんが、通
信が果たせる役割について、考えていきたいと
思います。

3点目は帰還開始後の通信の役割についてで
す。県外に避難している人で、町の復興を望ま
ない人はいないと思
いますが、心の中で自分も
帰るべきだったとか、自分もそこに携わってい
たかったなど、複雑な心情があるのではないかと
思います。「帰る」「帰らない」といった視点
だけでなく、浪江の復興にこだわる人を町の内
外にどれだけ増やすかが今後大切なの
だと思

ます。この視点からも、取材協力者を含めて、
全国に協力者がいるこの体制が、『浪江のこ
ころ通信』にとつての持ち味なのだ
と改めて思
いました。



パネルディスカッションの様子

情報交換会の中で、取材協力者の皆さんからいただいたコメントをまとめました。
(順不同)

畠山 順子さん (秋田県／特定非営利活動法人
あきたパートナーシップ)

最近紙面に掲載されていたご家族は、全国を転々と避難した後に秋田に来られた方々でした。私たちの事務所の近くに避難されたこともあり、多くのつながりができ、家族の想いの経過や子供たちの節目を目にしてきていたので、その通信を見たときにとても感動しました。このように縁ができることがとてもうれしいです。

高杉 静子さん (秋田県／特定非営利活動法人
あきたパートナーシップ)

福島から避難されてきている方の支援をしていることを話すと、「まだそんなに避難している人がいるのか」と驚かれることが増えました。私たちのように被災者に関わっている者が、避難先の県民向けにも情報を伝えていく必要があると感じています。

齋藤 和人さん (山形県／特定非営利活動法人
山形の公益活動を応援する会・アミル)

多様な考え方を持った方々が、それぞれの決断をしようとしているときに、広報ツールとして『浪江のこころ通信』だけで対応しようとすると、役割の範囲が広くなり過ぎてしまうと感じます。役割を少し整理しながら考えていったら良いのではないのでしょうか。全国にいる浪江町民がふるさとについて語り合える場になると良いと思います。

青木ユカリさん (宮城県／コミュニティ・ワークス)

大学に進学したタイミングで取材をさせていただいた方がいましたが、話を聞くだけでも希望が見えてくるように感じました。若い方でも、それぞれの思い出を切り口にして、町について語っていただくことはできると思います。座談会なども良いと感じました。

大泉太由子さん (宮城県／一般社団法人東北
圏地域づくりコンソーシアム)

帰町して前線でまちづくりに携わる方だけが復興の担い手ではなく、遠くからふるさとを想うことも復興に役立っていくはずです。復興に私も役立てる、関わることができるという仕組みを作れないかと感じました。

菊池 康弘さん (茨城県／特定非営利活動法人
茨城NPOセンター・コモンズ)

浪江町がある限りは『浪江のこころ通信』は続

けていくべきだと感じました。若い人であっても、震災前に戻れるなら戻りたいと考える方が多いと思うし、そういった方に向けても通信を続け、帰られた方、避難している方の声を届けることは有効かと思います。

風間 文子さん (千葉県／特定非営利活動法人
ちば市民活動・市民事業サポートクラブ)

『浪江のこころ通信』は当初から寄り添い型の良い企画で、関わっていて良かったなと思っています。昨年、千葉から福島の復興住宅に戻った方から、とにかく寂しいと連絡が来るようになりました。後ろ向きに見られてしまうかもしれませんが、多様性としてそういう方がいることも分かってもらいたいです。

新保 絵梨さん (新潟県／特定非営利活動法人
くびき野NPOサポートセンター)

『浪江のこころ通信』に出る方はポジティブなメッセージがあるように感じている、と取材した皆さんから言われます。知らない土地でこれからどうしていいかわからないと感じている方でも取材を受けていただけるように、これからは傾聴という考え方で向き合っていきたいです。

竹内 瞳さん (広島県／ひろしま市民活動ネット
ワークHEART to HEART)

町民の皆さんを一様に捉えることが難しくなってきたと感じます。最近の記事の中で多様性を認めて欲しいという方がいらっしゃいました。帰る、帰らないにこだわらず、いろんな気持ちを調和させていくことも必要なかと思っています。

彌永 恵理さん (福岡県／特定非営利活動法人
おおむた・わいわいまちづくりネットワーク)

若い方に取材した際、「ふるさとに対して自分がどう思っていたのかを文章にすることで考えをまとめられた。心を整理するきっかけをもらえてありがたかった」と言われました。取材する私たちが思いもかけずありがたい言葉をいただき、これは大切な仕事なのだと感じています。

宮道 喜一さん (沖縄県／特定非営利活動法人
まちなか研究所わくわく)

今後、避難指示が解除されても沖縄で暮らし続ける方がいると思いますが、その後の支援はどうなるのか不安という方が多いと聞いています。避難指示解除という局面に向けて、復興への次の展開が始まっているように感じました。

これからの浪江のこころプロジェクト

平成29年8月5日(土)午後、福島市内にて、「浪江のこころプロジェクト取材協力者座談会」を開催しました。

「浪江のこころプロジェクト」のこれからの在り方について意見交換を行いました。

と き 平成29年8月5日(土)

と ころ ホテル福島グリーンパレス
(福島県福島市太田町13-53)

参加者 (敬称略)

宮口 勝美

浪江町副町長

櫻井 常矢

浪江のこころプロジェクトプロジェクトリーダー／高崎経済大学教授

古山 郁

認定NPO法人市民公益活動パートナーズ代表理事／福島県

齋藤 和人

NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 代表理事／山形県

鍋嶋 洋子

認定NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ専務理事・事務局長／千葉県



左から、櫻井プロジェクトリーダー、齋藤氏、古山氏、鍋嶋氏、宮口副町長

◆町の一部避難指示解除を受けての状況

櫻井 皆さんと一緒に進めてきた「浪江のころプロジェクト」も7年目に入りました。これまでと大きく状況が異なっているのは、この3月末で町の一部の避難指示が解除になったことです。町の復興に向け、帰還が始まること自体は歓迎すべきことですが、一方で、全国に分散して生活を続ける町民とふるさと浪江町との関係は新しい局面に入っていきます。その中でこのプロジェクトが目指すところはどうか変わっていくのでしょうか。

まずは、一部避難指示解除を受けて、それぞれの地域で皆さんが感じになっていることから、お話いただければと思います。

齋藤 私たちの団体では、福島県の生活再建支援拠点を運営しています。浪江町から山形県内に避難している方は、親戚等縁があつていらした方が多かつたこともあるのか、ご自分で生活設計をして先を決めていく意識が強い方が多いと感じています。一緒にいらしたお子さんたちは、山形での生活が長くなつてきており、幼稚園から小学校に入るなどして、浪江のことを意識しない世代も出てきていると思います。

鍋嶋 浪江町復興支援員を受け入れて一緒に支援活動をしています。避難指示解除になったからといって、すぐに状況が変わる訳でもないのですが、生活再建をどこにするのかといったことについて、皆さん、徐々に具体的にイメージし

ていつているところではないかと思えます。福島に戻られて復興公営住宅に入った方もいらっしゃるのですが、マンションのような住環境に慣れないせいか、寂しい、千葉に帰りたい、と支援員に連絡されてくる方もいらっしゃるようです。

古山 浪江のころ通信の取材でお会いしている方からは、もうしばらく今のところで生活する、いずれ帰る予定はある、などといったお話しはありますが、避難指示解除になって何かが切り替わったような感じはまだないですね。

ただ、復興公営住宅の中の自治会の状況については少し心配です。仮設住宅自治会の役員をされていた方が、そのまま復興公営住宅の自治会を担っていらっしゃるケースが多いですが、ややお疲れの方が目立ちます。また、復興公営住宅の自治会と、住宅を受け入れている周辺地域の自治会との関係も、うまくいっていない



古山 郁さん

ケースが多いように思います。地元の人との溝があるままに進んでしまうと、この先、困り事が増えていかないかと心配しています。

宮口副町長 町の一部の避難指示が解除になって、平日は役場の職員がアパートに入っていることもあり、夜でも明かりがついているし、車も停まっついで安心感があるのですが、週末になると、皆さん家族のところに戻られてしまい、急にさみしくなります。買い物を含め、生活環境はまだまだ厳しいので、「皆早く帰ってきてくれ」とはまだなかなか言いにくい状況です。

直近の数字では、町に戻られた方は264人。リタイア世代が多いです。町に戻つたと言っても、避難先の住宅と行き来している方も多いので、正確な数は把握が難しいです。ただ、週末に家族で町を見に来る人は増えたな、とは感じています。

復興公営住宅については、仮設住宅の延長で、



宮口副町長

同じように支援してもらえると、感覚で入居する人も多いのだと思います。仮設住宅等でうまくつながりを作っていた人ほど、復興公営住宅でさみしさを感じているかもしれませんね。

町民はまだほとんど町外にいますので、福祉等の民生部署は、全国向けの対応が続いています。加えて、仮設住宅から復興公営住宅への移転も進んでおり、支援範囲がどんどん広がっています。一方で建設・産業サイドの部署では、町内を整備しないと帰ってもらえないということとで頑張っています。全体として仕事量は増えており、職員も大変になっています。

せっかく町に戻られている元氣なリタイア世代等、復興に向けて何か手伝いたいと考えている人を、復興の担い手としてつないでいけるよう、シルバー人材センターのような組織を構想しているのですが、なかなか実現できず、もがいているところです。

◆『浪江のこころ通信』が伝えていくこと

櫻井 『浪江のこころ通信』は、事実とか数字を発信する広報ではなく、ちよつと抽象的になりませんが、読者が浪江の「こころ」とつながっていく役割が必要と考えています。そのため、何を発信するのか、何を伝えていくのかということとを改めて共有したいと思います。リタイア世代という話がありました。逆に、今後の町を支えていく若い世代は、町に対してどのような

想いを抱いているのでしょうか。若い方の想いを『浪江のこころ通信』はどのように伝えていくことができているのでしょうか。

古山 若い世代に取材をすると、今の暮らしの話が多く出てきます。昔の町への想いはなかなか直接には出てきませんが、仕方ないのかなと思います。震災の年に生まれた子供が小学生になり、中学生が大学生になっていく中で、この世代が抱く町の記憶が、大人のそれとは違うのは当たり前だと思います。そういうことを大人にも伝えていきたい、若い人の話はそのまま原稿にしたいと思っています。

鍋嶋 先日、埼玉の大学で野球に打ち込んでいる女性を取材しました。震災の頃は小学6年生だったのですが、その頃の話はなかなか深まらないですね。今の自分の暮らしや、野球を頑張っていますという話はたくさん出てきます。これからの夢として、東北の高校に硬式野球の



櫻井常矢プロジェクトリーダー



鍋嶋 洋子さん

女子部を作りたい、とおっしゃっていました。浪江に長く暮らした方は浪江の思い出の話が多いし、避難がとて大変だった人は6年たっても避難の話から始まります。若い世代は、今、自分が頑張っていることの話が中心になる。それぞれのお話の中から、どこにいても浪江町民は頑張っているよ、ということを発信しつつ、役割は大きいと思います。そういった話を読むことでほかの町民も元氣をもらえるのではないのでしょうか。

宮口副町長 避難生活の話は当初は涙なくして読めませんでした。最近では「みんなそうだったね」という思いで読むことが増えています。そして、その先の「今どうしている」という話に目が行くようになっていきます。また、広報が再開した頃は、みんな『浪江のこころ通信』から読み始めていましたが、今では真つ先に開くページではなくなっています。読者側の受け取り方も変



齋藤 和人さん

わってきているということだと思えます。

ちょうど今朝の新聞に、浪江の子が通っている中学校のハンドボールチームが、東北大会で準優勝したという記事が出ていました。そういう記事を見ると「おっ」と嬉しくなりますね。

『浪江のこころ通信』もそれと同じで、若い世代がどこであれ頑張つて夢を持って生きていくということが、私たちにとって刺激になります。

若い世代にとつて、浪江は親のふるさとです。お盆等に帰省していれば、親のふるさとが自分にとつてもふるさとになっていくと思えますが、これまでは立入りができなかったため、実感を持ってもらうにはまだ時間がかかると思っています。

齋藤 『浪江のこころ通信』の役割は変遷してきていますが、浪江以外にいても、浪江を感じることもできるツールとしての役割が引き続きあると思えます。また、私たちがまだ気付いていない役割、例えば「将来こういう資源を使って町

で起業したい」と考えている人に資源をつないでいけるような、そういう潜在的な力を持っているのではないかと感じています。

子供たちが成長していった時に、親が子供たちに自分のふるさとについて伝えていくことは重要だと思えます。一定の年齢になったら子供たちに取材してもらうのもよいのではないのでしょうか。

櫻井 『浪江のこころプロジェクト』は、時々こうやって議論しながら、その役割を問い直しながら進めてきました。今日の話の中から、浪江にゆかりのある人が頑張っている姿を共有し、縁を確かめる手段として、『浪江のこころ通信』があるということを確認できたと思えます。

◆協働事業としての「浪江のこころプロジェクト」

櫻井 町の一部が避難指示解除になったと言つても、役場の職員や町に戻つた町民の皆さんだけでは、まだまだ復興が力強く進むという状況ではないと思われれます。そういった中で、「浪江のこころプロジェクト」はどのような役割を果たしていくことができるのでしょうか。

銅嶋 これから浪江町が「帰ることができる場所」になっていく中で、遠く離れて暮らしている町民の方でも、あの海・橋・街並み・店をどうしたい・こうしたいといった町に対する想いを持ち寄り、提案していくことができるツールにできないかと思っています。

みんなが一斉に帰ってくるのであれば、町の復興については、そこに携わる方で考えていけば十分でしょうが、実際帰っている人は少ないし、この後、急に増える訳でもないと思います。町外にいる人をつながりを作っていくということであれば、気軽に想いを形にできる場が必要だと思えます。提言というところ堅くなってしまうので、「こうなったら良い」をちょっと聞くようなことでもいいと思うのですが。

櫻井 随分前に取材した方の中に「自分は裏切つた人間だから、町をどうしてほしいなどとは言えない」とおっしゃる方がいました。町に関わっていない期間が長くなっていることで、言いがらさを深めている側面はあると思います。だからこそ、発信する機会があると良いのかもしれないですね。

古山 特に明確な根拠がある訳ではないのですが、「浪江のこころプロジェクト」の第一段階は、今回の一部避難指示解除ではなく、全町が避難指示解除になる時期に終わるのではないかと考えていました。そして、その段階では、例えば、「浪江のこころ通信社」のような情報発信基地を作つて、町民の方々にその役割を渡していつでも良いのでは、浪江の方々が情報に関連して起業するメディアとなつていっても良いのではと思つていました。

櫻井 『浪江のこころ通信』は、第三者である我々が、客観的な目線で取材している訳ですが、その役割を徐々に、町民に担っていたただくのもいいのではないかと、という話はこれまでの情報交換会でも出ていました。

鍋嶋 ただ、自分の想いを言葉にすることが苦手な方もいるし、言葉が過激になってしまつてうまく伝わらない方もいます。そのような方からも想いを引き出すのが『浪江のこころ通信』の取材者の役割なので、担い手の位置付けは重要だと思います。

櫻井 大切なのは、バトンの渡し方、段階の踏み方です。町民の方に取材に入つていただくにしても、我々がサポート側に回つて徐々にノウハウを伝えていくといったようにしっかりと人を育てていく仕組みが大切です。そのような中間的な仕組みが、協働のまちづくりには重要になってきます。

宮口副町長 中間支援的な組織が必要だということとは、役場の中でも話しています。行政では立ち入れませんが、民間では採算がとれない部分、そういったところにまちづくり会社のような中間支援組織がコーディネートしてくれる仕組みが必要と考えています。

櫻井 震災直後は、何もない中で、何でもいから外の力を借りたいという雰囲気や役場にありました。その環境が「浪江のこころプロジェクト」を生み出した、危機が希望を生んだ側面があると思います。ただ、それから数年がたち、徐々にいわゆる役場に戻つていてることを感じます。役場だけではまだまだ大変な状況がある中で、このような協働型事業はこれからますます大切であると考えています。

齋藤 ある意味協働せざるを得ない状況がずっと続いた後に、普通の行政とNPO、行政と町民との関係に戻つていく時期、関係性を作り直す

タイミングになつていてということだと思いません。『浪江のこころ通信』は、我々のような第三者と浪江町がつながる機会になつてきましたし、浪江に関心のある人が全国にいるということは、町の復興に向けて貴重な資源だと思います。記事が町の広報に載つていてというのも効果が大きいと思うので、この形式はしばらく続けてほしいと思います。

宮口副町長 協働の力を、復興に向けた行政の中でも生かしていくことは必要だと考えています。それを今、どう浸透させてやっていくかということだと思っています。

『浪江のこころ通信』は震災からの心の動きの記録です。2万2千人いれば2万2千通りの想いがあつた訳で、まだ取材数は限られています。ですが、こころのアーカイブとして、どう残していくのかが我々の重要な役目だと考えています。

櫻井 避難指示が一部解除になつて、町への帰還ということが方向性として出てきた中で、町民を支援していく取組みは一段落するのかな、といった印象を受けていました。今日、今日の議論の中で「浪江のこころプロジェクト」のような、外の人間と一緒に関わつて復興を進めていく協働の枠組みが重要であると感じました。引き続き頑張りていきたいと思っています。



座談会の様子

